

序説

口永良部島へ明治維新後入植し、「我の賜った土地である」¹と言って1 1 人を開拓に従事させ封建的な振る舞いを持って島を統治或いは支配していたのが、第1 4代永吉領主島津又七である。島を開拓するにあたって選ばれたか、主体的にであったか定かではないが、1 1 人は何処から、どのような理由で、何が目的で、孤島に行く事を決断したのだろうか。そして又七と、1 1 人の暮らしはどうだったか。最後に衰退していく開拓地「新村」を去る又七の胸中を覗くこととする。

第1章 口永良部島の起源

『上屋久町誌』によると「口永良部の起源と思われる黄褐色火山灰層がある」²との記載により起源を調べると、5 0 万年前に海上に成長したのが起源である。図1³により

- ① 50 万年前より前 後境・城ヶ鼻火山・その後野池・鉢窪・古岳・新岳火山形成
- ② 20 万年前以前 番屋ヶ峰火山
- ③ 1 0 万年前以前 高堂森火山
- ④ 1 万年前まで 野池火山
最近の1 万年間 古岳・鉢窪・新岳の溶岩流出と爆発的噴火を繰り返した。現在でも噴気活動が活発である。島の北部の東側に遺跡が集中しているのはそのためである。

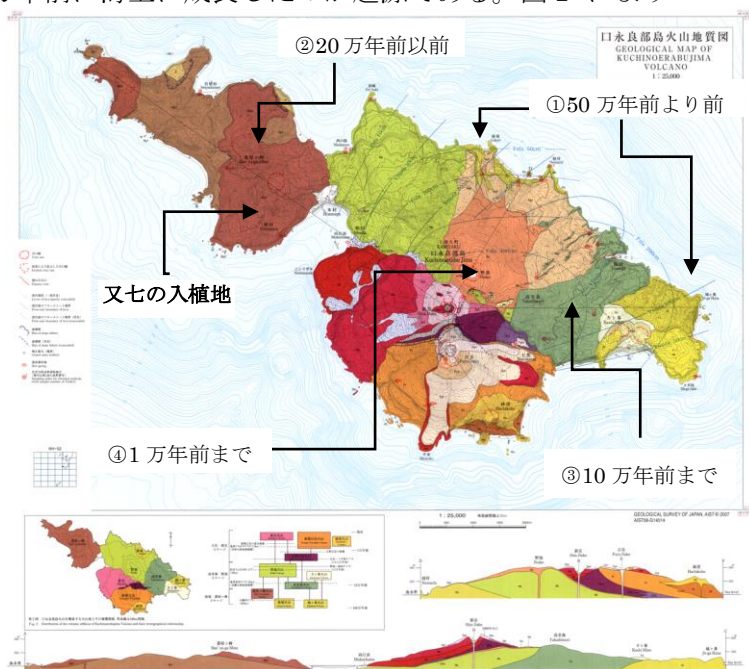


図1 口永良部火山地質図

上屋久町と口永良部島で合計1 6ヶ所の遺跡があり1 0ヶ所がある。旧石器時代の遺跡は発

¹ 「口永良部島調査報告書」 P 4 1

「口永良部」 P 3

² 「上屋久町郷土誌」 P 1 0 0

³ 「産業技術総合研究所 地質調査総合センターHP」 より貼付

https://gbank.gsj.jp/volcano/Act_Vol/kuchinoerabu/text/exp14-1.html

掘されていないが、6000年前縄文時代と2300年前の弥生時代の遺跡は発掘された。縄文遺跡がある所は、その地方の言わば文化圏である。しかし1700年前の古墳時代の遺跡は全くない⁵。ただし、「須恵器の発見があるが、奈良・平安時代以降のものである。」⁶では口永良部の文化形成はどうだったか。

第1章 口永良部島は誰のものか

口永良部は、縄文時代前期8000～9000年前に住人がいた事が、屋久島の土器或は口永良部島の遺跡（金峰神社付近）土器で確認できる⁷。誰の支配の下で生活し文化を繋いで来たのかというと、鎌倉時代（中世の1192年 - 1333年）の守護島津氏所領になってからである。領地争いが興り、支配者が交代するが、住民にとって特別な事ではなく、所領の目的は、海上航路の安全確保の為の拠点であった。屋久島と同島を中心に貿易で財を成していた事が解る⁸。まず、南蛮船の漂着と鉄砲により攻撃を仕掛け所有する。その勝者が島津氏である。江戸徳川幕府より頂戴した所領はその後継続した。島津又七が、口永良部に移住したときに「この島を島

時代	年代	口永良部島所有者
縄文時代		土器発見
弥生時代		遺跡発見
飛鳥時代		ヤク人帰化・多羅国属
奈良時代		須恵器の出土
平安時代		須恵器の出土
鎌倉時代		守護島津氏所領
室町時代	1424年	島津氏
	1427年	種子島氏
	1471年	海図「亦島やくしま」
	1543年	蘭寇（ねじめ）氏領有
		南蛮船漂着・鉄砲
	1544年	種子島氏
	1566年	蘭寇重長（ねじめしげなが）口永良部島の種子島勢を攻撃
安土桃山時代	1573年	島津氏
	1595年	島津以久領主
	1599年	種子島氏所領・島津氏実質的領有地
江戸時代		島津氏
	1609年	琉球出兵
明治時代		島津氏

表 2: 口永良部の所有者と出来事

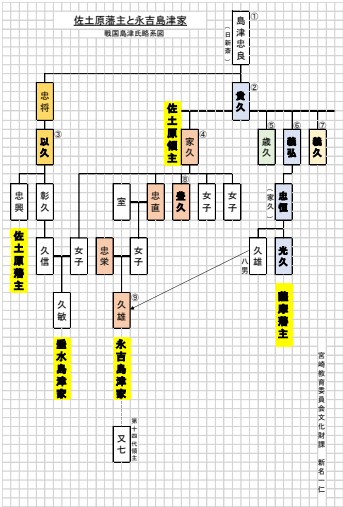


図 3: 佐土原藩主と永吉島津家

4 「上屋久町郷土誌」 P 112
5 「上屋久町郷土誌」 P 115 上段
6 「上屋久町郷土誌」 P 115 下段
7 「上屋久町郷土誌」 P 112、「口永良部島ポータルサイト」歴史年表より「上屋久町の埋蔵文化財―遺跡分布調査報告書」、1989
8 「上屋久町郷土誌」 P 133
9 「上屋久町郷土誌」の第2編1章～3章を口永良部関係のみ簡略に図にした。
「島津家久 豊久父子と日向国」 P 23
10 「上屋久町郷土誌」 P 175
11 「上屋久町郷土誌」 P 153

又七は、我らの先祖佐土原領主が賜ったと理解していたのではない。単に島津の領地だったので根拠なく言い放ったのであろうか。又『上屋久町郷土誌』によると、上屋久町から16ヶ所の遺跡所在地が発掘されている¹²。上屋久町6ヶ所、口永良部島10ヶ所であり、縄文前期から弥生時代の土器である。

縄文人が現れたのが今から6000年前で、その後1000年間、遺跡は見当たらない¹³。そして、弥生人が現れたのが、紀元前2100年～1900年である。その後、須恵器(奈良・平安以降の物)が発見された。このことから口永良部は太古の昔から「独立国」として存在していたことが解る。『西之表市年表』によると、629年に田部連を掖玖島調査に派遣した。677年には、多禰嶋人が入朝し、679年には、多禰嶋に遣し、多禰国の図を貢り、682年に多禰人、掖玖人、阿麻弥人に禄を賜うのである¹⁴。733年には、「多禰嶋熊毛郡大領外従七位下安志託等十一人に多禰後国造の姓を賜う。益救郡大領外六位下加理伽等一百三十六人に多禰の直。能満郡少領外従八位上栗麻呂等九百六十九人に直姓を賜う」とあるので、『三国名勝図絵』では、「多禰国には、熊毛、益救、能満の三郡がありしを知る

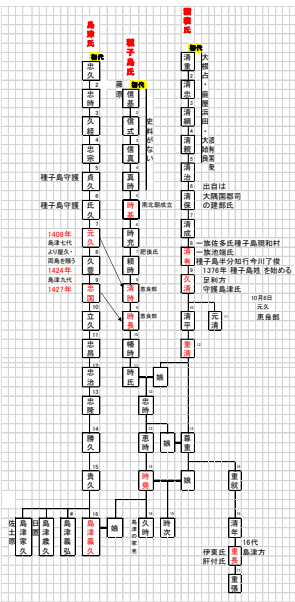


図5 婚姻関係

が、屋久、恵良部両島を与えられたとある。¹⁷

その後図4¹⁸より概略として、第8代清時より3代後の第11代時氏は、第12第禰寝重清の娘が妻

1871	明治	口永良部村			
1870	江戸	口永良部島村			
1868					
1843		★ 口永良部村		▲	
1795		永良部村			
1728		「規模帳」			
1612		★		▲	
1612		▲/★		▲	
1603	安土桃山				
1599		▲/★		▲	▲は知覧へ
1599	戦国	▲/★	▲	▲	
1579		▲		▲	
1573		▲		▲	
1570	安土桃山	★/▲		▲	
1562		★	●	●▲	
1545		▲		▲	
1544		▲		▲	
1543		▲		▲	
1467	戦国	★/▲		▲	
1427		▲		▲	
1424		★		▲	
1408		▲		▲	← 恵良部登場
1401		▲		▲	
1392	南北朝			★	
1363				★	
1336	室町			★/▲	
1333				★	
1185	鎌倉	★	★	★	
1167	平氏政権				
10始-12後	王朝国家				
794	平安				← 屋久島登場
710	奈良				← 種子島国登場
592	飛鳥				
1400	古墳				
4000	前旧石器				
		屋久島	口永良部	種子島	
		★ 島津氏	▲ 種子島氏	● 禰寝氏	(支配関係)

べし」¹⁵とある。今の屋久島・永良部島を益救・表4 時代と支配

能満の二郡として、多禰島に属して一国とし、国造を置くこと旧事紀国造本紀に見える。そして、876年に、多禰島を大隅国に、902年に掖玖郡を護謨郡と改めた。表3¹⁶の概略は、屋久島、口永良部、種子島は、島津氏と種子島氏と禰寝氏による支配があり、始めに屋久島が記録上は登場する。中国の史料で、608年である。日本の史料は、618年である。その時の文字は「掖玖」「夜句」「邪久」が使われた。そして、種子島は太宰府からの南方の島々への叙位・可賜品があり、709年に律令制に基づく国郡区として種子島国が設置される。

口永良部島は、1408年に、第7代島津元久より、第8代種子島清時が、屋久、恵良部両島を与えられたとある。¹⁷

12 「上屋久町郷土誌」 P 94 の図 1 より
 13 「上屋久町郷土誌」 P 112 下段
 14 「西之表市年表」 P 2
 15 「西之表市年表」 P
 16 「島津家久 豊久父子と日向国」 P 4 と「島津家家臣団系図集」 P 146
 17 「上屋久町郷土誌」 P 153
 18 「上屋久町郷土誌」 P 116～P 168 を図化したものである

であり、第13代忠時の娘が、第13代禰寝尊重の妻である。更に第14代種子島時堯の娘が、島津義久の妻である。と言う事は、南島の島として屋久島が存在したが、大隅国の禰寝氏が種子島を支配したので、口永良部は、禰寝氏の支配にあったが、島津氏が勢力を増して禰寝氏より屋久島、口永良部島、そして種子島を支配するが、種子島は、地頭であり職を、島津に譲るのに正式な文書がない。1598年に島津は屋久島、口永良部を貸してほしいと要請があったので証書を作って応じたが、証書を保管していた弾右衛門時貞が、1606年に現和村で自殺した時に焼いてしまった。¹⁹それ以来屋久島、口永良部島は島津氏の事実上の領有となる(1612年)。以後島津氏の支配が続き明治藩政期にも及んだ。

第2章 (口永良部島)字図の変遷

又七は、明治初期に11人を連れて入植した。その場所を「新村」と呼ぶ。意味は新しい村を作ると言う事である。開拓精神に燃えた男達のロマンの物語のようであるが実態はどうだったのか。まず又七は、新村の「156番地に息子久徴と一緒に住んでいた」²⁰、とある。ここは『明治22年の大字図』によると²¹、1番「上水道」から121番「城ノ鼻」迄あり、「新村」から大字1番、2番、3番地から始まっている。明治22年に、湯向、田代、本村、新村と4ヶ所の集落があり口永良部を形成していた。その時の大字図が、「新村」を中心に作成されている事は、島の中心が「新村」であった事を裏付けるものである。「母の話」²²によると1番の上水道は「新村」の水源地がある、2番より8番までが住居があった。9番「後迫」より26番「倉崎山」まで、殆ど畑であった。8

番号	小字名	読み方
1	上水道	じょうすいどう
2	街道ノ上	かいどうのうら
3	吹道	ふきどう
4	岩下	いわした
5	磯道	いそみち
6	ゴンボ山	ごんぼやま
7	出口	でぐち
8	川西	かわにし
9	後迫	うっがさこ
10	ムナコ	むなご
11	芭蕉浦崎	ばしょううら
12	二重堀	ふたえぼい
13	掘作	ほりさく
14	渥若峯	ばんやみね
15	新山	しんやま
16	下小浦	しもこうら
17	アクチガ迫	あつがさこ
18	齒形ヶ平	はかたがでら
19	コゴ浦	こごら
20	先キノ大平	さききのおおひら
21	クブイ	くぶい
22	スゲイ山	すげいやま
23	ナゲシ	なげし
24	北亀	きたかめ
25	大平	おおだいら
26	倉崎山	くらさきやま
27	白伐	しろき

表6 口永良部島小字名

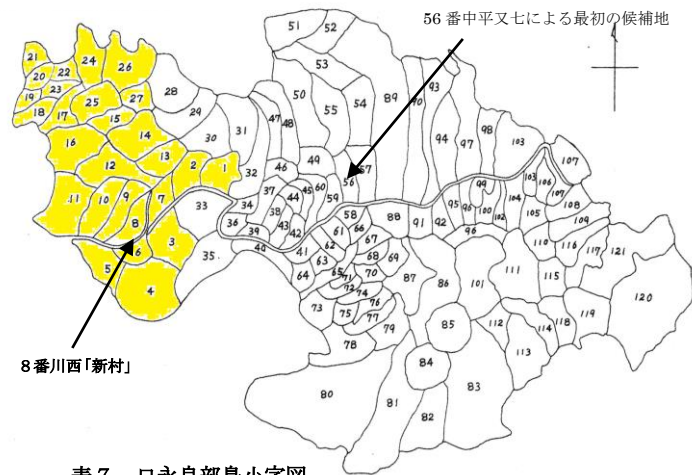


表7 口永良部島小字図

番
「川西」の自宅から22番「スゲイ山」、23番「ナゲシ」迄歩いて畑仕事に行くのは難儀なことであった。昭和20年頃には、2番の「街道ノ上」には、「学校長の住居があつて本村まで通勤していた」²³、何故こんなところに住んだのかわからない。当時の住居数は、21戸である。又156番地には、羊を1匹飼って

¹⁹ 「上屋久町郷土誌」 P177

²⁰ 「新村の歴史」 P1

²¹ 「上屋久町郷土誌」 P70、P

²² 母とは筆者の母の事である（昭和10年生）令和3年86歳（明晰・存命）である

²³ 「母口伝」

いた記憶もある²⁴。このことは次のレポートにまとめることとする。さらに、又七は、始めから「新村」に來たのではなく、当初、島のほぼ中央の56番「中平」(ナカデラ)と呼ぶ場所を選んだが、水が確保できず諦め、あちこちを探し回り「新村」を見つけた。そこが又七の定住の地となる。そのように又七、「新村」が、大字図作成時に、大きな役割を果たしていることが解るので、又七は島の権力者であったとみてよいのか、否何らかの影響を持っていたのだろうか。『上屋久町誌』によると、1726年(享保11年)には、口永良部島の人口は、419人であり、1家族平均10人で、5人家族・6人家族が多く、ついで4人家族・3人家族であった²⁵。屋久島北部の吉田の2倍以上である。1812年(文化9年)の家数は、64軒であった。²⁶明治(1885)18年には、島の人口は、461人とある。内68人は釣漁の為の寄留者であり、400人弱で有る。大正8年では、湯向12名、田代6名、本村125名、新村19戸である。ここで、明治5年に、11名で入植し、30年以上たっても19戸である。明治14年の1世帯当たりの人数(4, 6人)で換算する²⁷と87人になる。又昭和29年には、169人(子供27人)である。この人口の変化をどう解釈すればいいか解らない。そして、この小集団の長が、島を統治するだけのなんらかの力があつたことは次回で考察したい。ただ11人の年齢が不明で有り、その後の家族関係も今の所不明である。がしかし、考えられるのは徐々に又七は、島に移植者を呼び寄せた可能性がある事を指摘しておく。理由は次回記載する。

第3章 (口永良部島)住所の変遷

その後、明治35年の口永良部の住居表示は、護謨郡口永良部島(156)〇〇〇番戸となっている。意味は、口永良部島の〇〇〇番目の家と言う意味であろう。現在は、地番と住居表示は異なる場合が多いが、まだまだ口永良部では当たり前である。昭和8年の住居表示は、熊毛郡上屋久村口永良部島(77)〇〇番戸になっている²⁸。

口永良部の行政区分の歴史的背景を説明する。明治4年の廃藩置県から、明治12年の「郡区町村編成法」により、国、郡、郷、村から国、郡、村になった。がしかし、口永良部は大隅国護謨郡になり口永良部村である。明治5年当初は、屋久島は護謨郡、種子島は熊毛郡、そして郡治所は種子島に置かれた。郡長は、土持佐平太である。そして同年11月に「郡制」と同時期に、「大区、小区制」で実施され、郷を大区へ村を小区へ替え、小区の村に1から順番を付け

口永良部字地番の所有者の変遷						
字番号	字名	所有者	理由	所有者		
1	上水道	大正2年1月	官有地	大正2年文書		
			明治4年6月28日	保存	農商務省	
			明治4年6月28日	移転	牧益吉他92名	92名簿有 島津久徹有
			大正9年8月9日		牧益吉他92名	92名簿有 島津久徹有
			大正9年8月18日		牧益吉他92名	92名簿有 島津久徹有
			大正9年8月23日		牧益吉他92名	92名簿有 島津久徹有
			大正9年9月15日		牧益吉他92名	92名簿有 島津久徹有
			大正9年9月21日		牧益吉他92名	92名簿有 島津久徹有
			昭和24年12月19日		農林省	
			昭和22年12月2日		牧義盛	
32	ミージー	昭和17年7月15日	口永良部共有	昭和24年12月19日	農林省	
				昭和32年12月2日	個人	
2	街道ノ上			昭和35年5月11日	個人	
22	スケイ山			昭和5年5月1日	農林省	
				昭和32年3月1日	個人	
32	ミージー	昭和12年7月15日	口永良部共有	昭和24年12月19日	農林省	
				昭和22年12月2日	個人	
6	コンボ山	昭和25年3月7日	農林省	昭和25年4月25日	個人	
12	二重堀	昭和4年7月31日	口永良部共有	昭和6年6月30日	個人	
				昭和16年3月5日	受付	
17	アケチケ追	昭和5年5月1日	農林省	昭和32年3月1日	個人	
				昭和51年6月3日	受付	
表 8 口永良部字地番の所有者の変遷						

24 「母口伝」
25 「上屋久町郷土誌」 P 199
26 「上屋久町郷土誌」 P 200 2 番
27 「上屋久町郷土誌」 P 199 表 1 1 の口永良部の手札人数の上位 1 番と 2 番を使用した。
28 口永良部島 7 7 番戸を法務局で確認する。

地方行政の単位とした。屋久島では明治12年11月までこのままであった。明治5年から明治12年迄の経過は省くとして、「編成法」により公選制度ができる。ここで護謨郡について説明する。700年から800年の「律令制」により、国、郡、郷と区別され、709年直前から種子島国があり、733年から種子島国、と屋久島は、益救郡と護謨郡の2郡があり、824年には、種子島国、護謨郡、謨賢郷と信有郷になっている。国の行政機関が種子島にあるのはその為である。屋久島の場合は、県庁―護謨郡役所(鹿児島、護謨郡長)―村戸長役場(村戸長)となり、明治13年、14年に、有馬純行²⁹が、初代護謨郡長に、口永良部戸長は、若松長幸である。この有馬純行が又七と関係があるので次回に記載をする。

明治22年以前の住居表示は、³⁰

1889年(明治22年)4月1日	町村制施行に伴い馭謨郡上屋久村が成立。 護謨郡口永良部島〇〇
1896年(明治29年)3月29日	熊毛郡の所属となる。 熊毛郡上屋久村口永良部島〇〇
1958年(昭和33年)4月1日	上屋久村が町制を施行し、上屋久町が発足。 熊毛郡上屋久町口永良部島〇〇
2007年(平成19年)10月1日	屋久町と合併して屋久島町となる。 熊毛郡屋久島町口永良部島〇〇

そこで、実際の個別の山林・畑の土地所有変遷を確認する。表8によると、字番号1の上水道は、大正2年1月に官有地になった理由は、文筆によるものである。経緯は明治4年6月28日に、農商務省の所有になり、同時に牧益吉外92名の所有となった。そこに島津久徴の名がある。島津又七は、明治5年に移住したであろう。何故明治4年の課税台帳に、島津又七ではなく島津久徴であり、しかも移住前と言う事になる。大正9年9月21日迄所有している³¹。不自然であるが納得がいくのである。次回で記載したい。

第4章 N家の家系図

個人の家系図を何処迄辿れるのかは解らないが試みることにした。表9によると、A氏の先祖が、又七と共に来た人であると認識している。B氏、C氏、D氏は、其々口永良部島で誕生していた。

D氏については、明治5年(1872年)に生まれ、明治20年(1887年)に相続をし、昭和8年(1933年)に没した。61歳。丁度D氏と同じ年代で島津又七の息子島津久徴がいる。島津久徴は、慶応2年(1866年)生まれで、大正13年(1924年)12月没している。58歳。年の差6歳である。

²⁹ 有馬純行(鹿児島士族・明治4年8月10日従六位・明治12年12月従五位・明治15年12月正五位・明治16年11月1日没す)

³⁰ ウィキペディア <https://ja.wikipedia.org/wiki/%E4%B8%8A%E5%B1%8B%E4%B9%85%E7%94%BA> より貼付

³¹ 法務局「課税台帳」より確認

D 氏は、口永良部島77番戸で生まれたのが確認できた。ならばE氏は、明治5年には口永良部島に住んでいた事になる。子供が生まれると言う事は家族がいた。D 氏の母は、天保13年(1842年)に生まれ、大正14年(1925年)に没した。83 歳。E 氏については、生年月日と没年が解らない。がしかし、相続を明治20年(1887年)にしているので、50歳前後で没したと仮定すると、明治5年に息子が誕生しているので、35歳位であろうことは推定できる。E 氏の妻は、口永良部の人である、明治5年(1872年)以前には口永良部島住民の次女である³²ので、E 氏は青年期に口永良部に来て、その後島の住民と結婚したと推定はできる。資料がない。D 氏が島津久徴の世代であるならば、E 氏は、島津又七の世代であることは間違いない。

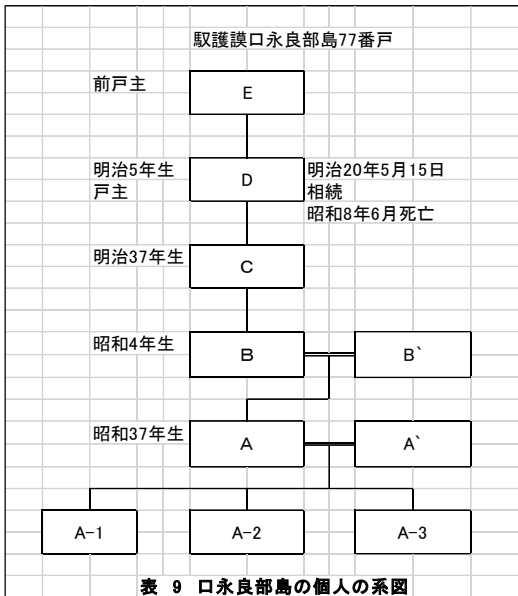


表 9 口永良部島の個人の系図

第5章 移住の理由

前回移住の理由をいくつか挙げたが、さらに地理的なものとして挙げておくと、屋久島に比べ口永良部は原野が多く、地租改正前後は大きく状況が異なることを指摘しておきたい。

又七が、口永良部島へ入植した理由の一つに地理的な条件がある。現在の口永良部の面積は、38km²(3800ha)である。明治18年の地租改正前と後を、表6³³より比較してみると、全体で60倍に増え、しかも官有地が民有地の20倍近い。民有地は50haから162haになり、官有地は、0から3055haになった。口永良部は、改正後は、「官有地の島」である。1 人当たりの耕地面積が少なくほぼ山林や原野と見なした。特に原野は島の半分あまりの面積を占めている。明治21年の屋久島・口永良部島の原野の面積は、4921ha で、その内口永良部島が、3分の1を占めている。藩政下では、山林は島津藩のものである³⁴。島津又七は、山林・原野に開拓精神を燃やしたことが解る。何故ならば、「新村」の小字図の住宅地以外は、畑になった。そして羊毛牧場経営にも係わるようになった。「羊毛牧場」に関しては次回の記載とする。

単位:ha		明治18年	
		改正前	改正後
民有地	田地	50	6
	畑地		9
	宅地		4
	切替畑		37
	合計	50	57
	山林		13
	林		2
	藪		28
	原野		53
	草生地		6
	合計		103
民有地合計		50	162
官有地	山林		550
	林		140
	藪		637
	原野		1697
	柴生地		30
	合計		3055
官有地合計			3055
総計		50	3217

表10 地租改正前後比較

³² E 氏の戸籍で確認できる

³³ 「上屋久町郷土誌」 P 300 の表 23 を簡略化した

³⁴ 「上屋久町郷土誌」 P 302

第6章 又七との関係

又七は、何故11名をどのような関係で連れて来たのだろうか。「谷山から大穂、野元姓であり、国分から、矢野一族が来た」³⁵と記載されている。又口永良部島で明治以降に移住してきた者の移住もとは、屋久島、谷山、久志、鹿児島、枕崎、川辺、日置である³⁶。

薩摩藩領は、薩摩国、大隅国、日向国諸県郡よりなり、城下鹿児島から交通網・連絡網が整備されていた。行政令達は重富筋、郡山筋、谷山筋、吉田筋、桜島筋、伊集院筋である。谷山は谷山筋に属し、谷山一喜入一今和泉一指宿一山川である³⁷。山川から出発したと思われる又七の一行は筋を利用したと推測できる。鹿児島城下の谷山は、山川へ行くには適地であった。又七は、鹿児島城下の演武館の隣の家老島津登の長男として誕生、その後幾年のちに、永吉島津家の家督相続をする。又七は永吉島津家14代当主であり家格は、所領持ちの一所持である。鹿児島城下で過ごしている。鹿児島城下から谷山筋を利用して山川へ行き、船による出航である。当時薩摩藩の琉球貿易は藩財源の一役を担っており、琉球貿易は公認された貿易であった³⁸。その貿易口を山川が担っており、津口番所として「屋久島口之永良部島」があった。この事は最後の藩政時代に家老を務めた島津又七は知っていた。だから、密貿易の重要拠点である口永良部に野心を燃やしたのである。「屋久島より口永良部の方が優れていた」³⁹と記載がある。

そこで、鹿児島市(谷山含)昭和46年の電話帳にて野元姓を調べてみると、合計63件で、旧谷山地区10件であった。意外と少なかった。引き続き調査の必要がある。何故ならば何処かに、11人との接点があるはずである。又七と一緒に移住した人達の心情を知りたい。

第7章 口永良部島の生業

『上屋久町誌』によると、「明治初期の口永良部の農業生産力は、羊、硫黄などである⁴⁰。明治14年(1881)に、馬は、小瀬田10頭、楠川15頭、宮之浦10頭、志戸子5頭、一湊0、吉田5頭、永田

和暦	西暦	月	主な出来事	又七
明治元年	1868	9	明治に改元	
明治2年	1869	5	五稜郭陥落	
		6	版籍奉還実施	
明治3年	1870	1	奇兵隊騒動勃発	
		2	奇兵隊鎮圧	
明治4年	1871	2	三番兵御親兵創設	
		5	金単位が円、銭、厘	
		6	西郷隆盛参議就任	
		7	廃藩置県	
		9	田畑勝手作許可	
		10	遷卒三千人、東京府内配置	
		11	岩倉使節団派遣	
明治5年	1872	2	土地永代売買禁止解禁	★
		7	西郷隆盛陸軍元帥近衛都督	
		9	琉球王国琉球藩	
		11	徴兵の詔	
明治6年	1873	1	徴兵令発布	
		7	地租改正条例	
		10	西郷隆盛辞任鹿児島県知事	
		11	大久保利通内務卿就任	
明治7年	1874	4	江藤新平処刑	★
明治8年	1875	10	島津久光左大臣辞任	
明治9年	1876	1	廃刀令を発布	
		10	熊本神風連の乱	
		10	秋月の乱	
		10	萩の乱	
		12	川路利良「密偵」潜入	
明治10年	1877	2	西南戦争勃発	
		3	田原坂の戦い	
		9	西南戦争終結	
明治11年	1878	5	大久保利通暗殺	★
明治12年	1879	4	琉球処分・沖縄県	★
明治13年	1880	6	国会開設請願	
明治14年	1881	10	明治天皇国会開設の詔	
明治18年	1885	12	太政官廃止内閣制度発足	
明治21年	1888	4	市町村令施行	★
明治23年	1890	7	第1回衆議院選挙	
明治27年	1894	8	日清戦争	
明治28年	1895	4	下関条約締結	
明治33年	1900			★
明治35年	1902	1	日英同盟締結	
明治37年	1904	2	日露戦争	
明治38年	1905	9	ポーツマス条約締結	
明治43年	1910	8	日韓併合条約締結	
明治44年	1911			★
明治45年	1912	7	明治天皇崩御	

表11 時世と又七 ★は又七関係年

³⁵ 「口永良部島調査報告書」 P 42

³⁶ 「口永良部島の歴史」 P 16

³⁷ 「山川町史」 P 387 上段

³⁸ 「山川町史」 P 386 下段

³⁹ 「山川町史」 P 386 下段

⁴⁰ 「上屋久町郷土誌」 P 459

10頭、口永良部島15頭である」。口永良部の頭数が多いことが解る。馬力が必要だったと言う事は、重労働があったのだろう。馬で運搬、耕作はそれだけの土地があり、物が豊富に生産されたことを裏付けるものである。開墾であつたり、耕作であつたり、運搬であつたりした。馬糞も利用したが、屋久島・口永良部島は、裏作、二期作共に少なく、施肥も貧弱であつたが、米の収穫量では鹿児島県内ではかなり良い位置を占めていた。畑で稲を作り米の収穫をしていた記憶がある。一般的には水稻栽培が主であるが、口永良部の場合は、田ではなく畑が主であつたので、馬力も必要だったのだろう。そして又七は「羊毛牧場」の経営に乗り出している。又もう一つは、硫黄生産も行つたので、様々な場面で、運搬手段であつたことが解る。羊毛と硫黄は、重要であるので次回記載したい。又七の「羊毛社」と「硫黄鉱山」事業である。

第8章 又七のその後

表11より又七が、関係する年と出来事をまとめたものである。又七が、口永良部に滞在したのは、明治2年～明治44年没である。がしかし、息子島津久徴が口永良部に移住したの⁴¹が、明治33年である。少なくとも明治33年迄か明治44年迄口永良部に関係していた。約30年～40年間である。又七の明治11年以降の人生、要するに西南戦争後の又七の人生である。鹿児島士族が、西郷隆盛を亡くし完全に中央に対して物言えぬ立場となり、牙を抜かれ、自信を喪失し、鹿児島県は、中央に対しておねだり乞食化し、中央も地方に対して特に鹿児島に対しては手厚く振舞っている。

又七の概略は、明治11年、家督を長男島津久徴に譲る⁴²。明治12年、152国立銀行に出資をしている。明治21年、鹿児島市長予備選に出ている。明治33年、口永良部島に長男久徴が入植する。明治44年、又七没す。又七は、この期間に「羊毛社」や「硫黄鉱山」事業を営んでいるのである。

そこで、又七は長い間口永良部島と係わりながら過ごしていたかどうか、痕跡がない。又七が様々な事業に係わったのは事実であるが、現地で行動を共にすると言う事は無かつたのではないか。そのことについては次回に記載する。

第9章 その後の11人(人口の変化)

口永良部島の「新村」の人口について列記したい。表12より「新村」には移植者は当初以外には無かつたのではないか。明治5年入植から大正8年迄の戸数が、3倍近い。50年余りの歳月での戸数の増加にしては自然増であると推測する。又昭和31年の30戸に増加しているが、大正から30年以上も経って、11戸しか増加がない。「上屋久町誌」によると明治14年の1世帯当たりの人数(4, 6人)による換算⁴³

年代	合計	男	女	戸	世帯
明治	元年				
	5年	11		7	
	6年	26	13	13	11
	7年				
	12年				
	21年				
	33年				
大正	8年			19	
昭和	31年	189		30	
	48年				12
	49年	28		12	
	60年	19		9	
平成	元年	8			4
	4年	8			

表12 「新村」の人口推移

⁴¹ 「新村の歴史」 P1

⁴² 「島津家家臣団系図集」 P146

⁴³ 「上屋久町郷土誌」 P199

では、大正8年の人口が、87人となる。そして昭和31年は、138人となる。1世帯当たりの人数が多少増加したと見てよい。で、「新村」の又七を中心とする入植者達は、結束力が強靱であり、温厚な性格で清潔に暮らした⁴⁴。

又七の統率力なのか、入植者の賢さなのか解らないが、又七が本村に行った時は、本村の住民は、「殿」と言い土下座をしていたと言われるが、これは、又七の「財」がものを言ったと見る。何故ならば、「羊毛」や「硫黄」等の事業に「財」を継ぎこんでいるので島民から見ると、鹿児島弁で「ぶげんしゃ」と呼ばれ、要するに「金持ち裕福者」で威張っていたのだらう事推測できる。

一時期は、人口も増え続けたが、自然増に近いものであり、よそ者は入らなかった。そんな中でも又七は、「財」にものを言わせ事業を強引に進めた。がしかし経営は順調ではなかった。口永良部島の貢献度は軽薄であり、離島の際は、開拓者(同志)に開拓地を売りつけ、そのお金を以て出て行ったので、当時の新村人は、又七一族の事を好意的ではない者もいる。そのような事で残された新村人は、皆で肩を寄せ合い協力を惜しまない、口永良部島では、昭和6年～7年に、鹿児島県の「模範部落」⁴⁵として指定された。

第10章 結論

口永良部島は、又七のものでは無かった。と言う意味は、口永良部に対して又七の意志が見当たらないと言う事である。一緒に就いていった人達との人間関係にも感動的な心象は無く、又七自身の「財」に対する執念で、藩政時代の名残を孤島において過ごした程度と理解することができる。又七が、島に定住しリーダーとして指揮し希望溢れる新天新地を開拓していたとは言い難い。何故ならば、「労役奉仕」があった。年貢を納めなければならなくて、奉仕は1日置きや2日置きに出ていた⁴⁶。並大抵ではなかった。安山登氏の「口永良部島の歴史」によると「明治になって薩藩の郷土が農民から収奪したような事を行うためには、正直で知能の余り優れていない者を必要としたのかもしれない」⁴⁷とあり、「それでないにしても・・・」と続いているが、又七は労働力として連れて行き農業をさせ、労役を課し、羊毛を導入し赤牛で運搬を行った。反論として安山登氏の所見によれば一緒に行った11人は、「無知無能」であるかの表現である。広辞苑では、「知能とは、知識と才能、知性の程度、〔心〕環境に適応し、新しい問題状況に対処する知的機能・能力」とある。が安山登氏の見識を疑うものである。何故ならば、当時の状況藩政下で士農工商制度があった。身分が人間として優れていたからではなかった。「支配体制」なのであって祖先に、「無知無能」のイメージを与え兼ねない。然るに名誉の為に記載した。

先住者に対しては、帯刀をし「土下座」を強いた。まだ「廃刀令」⁴⁸の無い時であり傍若無人ぶりが思い描かれる。又七は、偶然ではなく、準備し計画を立て口永良部島へ行った。そして、移住した

⁴⁴ 「口永良部島の歴史」 P21

⁴⁵ 「新村の歴史」 P8

⁴⁶ 「新村の歴史」 P7

⁴⁷ 「口永良部島の歴史」 P21

「口永良部調査報告書」 P42 には、神社文書によると「貧民を移し」とある

⁴⁸ 明治9年1876年3月28日、新政府は廃刀令を布告。

のではなく往来をする中で、金儲けの手段として「ヒト・モノ・カネ」を利用して世渡りを企んだのだろうか。ヒトとは、農民と思しき11人、モノとは口永良部島の財産であり、カネは藩家老(一所持)家格の秩禄の事である。まさに金にものを言わせ「武士の経営」⁴⁹で事業をした。その結果が口永良部に対する島民との接点が希薄になり貢献度も乏しい関係になった。

第11章 小括

そこで、明治時代30年間から40年間も口永良部島との拘わりを持っていた又七親子2代は、口永良部島での事業に失敗し、大正13年に東京へ移転する。人生の半分近くを口永良部島と係わった。そこに意味がない訳ではない。又七親子は、口永良部島にとっては少なからず必要でもあった。後に又七と関係がある薬丸猪八郎は、上屋久村長を4期(明治33年7月～大正5年6月)やっている⁵⁰。薬丸猪八郎は、口永良部で又七と「羊毛社」の経営をしていた人物である。当時の口永良部の上昇と活気が伺える。勢いは上屋久村にまで及んでいたのだろうか。又七の表と裏、陰陽や輪郭がすっきりしない。又七は大正天皇即位に伴い親族により「贈位正五位」事蹟調書⁵¹が出され、下賜される。大正5年である。人間関係から輪郭を描くことができるだろうか。今後の課題として又七の人間関係と経済活動を検証する必要がある。

参考文献

1. 大山勇作. 口永良部島調査報告書. 出版地不明: 屋久島高等学校, 1974 年.
2. 上屋久町長. 上屋久町郷土誌. 昭和 59 年.
3. 西之表市役所. 西之表市年表. 平成 3 年 2 月 25 日.
4. 新名一仁. 島津家久 豊久父子と日向国. 出版地不明: 宮崎教育委員会文化財課, 平成 21 年 10 月・11 月.
5. 野田幸敬. 島津家家臣団系図集 上・下. 出版地不明: 南方社, 2019 年 6 月 1 日.
6. 矢野義幸. 新村の歴史. 1990 年.
7. 明治過去帳. 出版地不明: 物故人名辞典新訂, 1988 年 11 月.
8. 安山登. 口永良部島の歴史. 1966 年.
9. 金岳小学校. 口永良部.
10. 佐竹忠七. 南島夜話.
11. 田島 康弘. 南太平洋海域調査研究報告. 2011 年 3 月.
12. 安山 登. 口永良部歴史の鍵.
13. 橋本一男. 「噴煙」一口永良部島紀行一. 昭和 34 年 10 月 25 日.

⁴⁹ 「鹿児島市史 第1巻」 - 第5編 明治前期の鹿児島 - P751

⁵⁰ 「上屋久郷土誌」 P362

⁵¹ 国立公文書館.

<https://www.digital.archives.go.jp/das/image-j/M00000000000000818224>

14. 鹿児島市. 鹿児島市史 第1巻. 昭和44年2月.

15. 山川町役場. 山川町史. 1958年